1966年の回顧と展望　会誌編集委員会

はじめに

本特集「回顧と展望」を会員の皆様に御届けし始めてから，今年で5回目を数えることになる。われわれ土木技術者がこの1年間に desk work や field work において神経をすりへらし，あるいは汗水を流して得たそれぞれの成果を，年の終りに当ってみんなで一度広に視野に立って眺めることは，土木事業が多種多様な部門に分かれているだけに欠かすことのできない必要性がある。

産業経済の発展とともに各種の整備計画が進むにともない，公共投資が多くなれば必然的に土木の事業量は増加し，またその規模も大型化してくる。この現象は土木技術者全員にとってはまことによろこばしいかぎりであるが，しかし半面高度の理論や技術の必要上どうしても専門の分化がいちじるしくなり，ともすれば一種のかたわになることもまぬがれないであろう。将来の傾向として，これはやむをえないことかも知れないが，なにか一抹の寂しさを感ずる。

たとえば，同じ橋の分野で仕事をしている人達でも，吊橋の現場で一人は塔，一人はケーブル，またある一人はトラス等の本体といったように，規模のうえから分業せざるをえない場合もあれば，ある現場では下部工から上部工まで全般にわたって担当する場合もある。こういった同じ分野の仕事に従事されている方には，この「回顧と展望」を通して，その専門の視野を広めると同時にお互いに反省の時を持ち，さらに資料の交換や討議の機会を得ていただければと願って，なるべく新しい技術内容を持ち，しかも特色のあるものを収録するように心掛けたつもりである。また，専門を異にされる方には，この「回顧と展望」を通してそれぞれの専門分野における現況がどうであるかを眺めることによって，幅広い土木技術者であるために新しい知識を積み上げていただくと同時に，将来の土木行政のあり方についてお考えいただけたらと思う。

近年，政府は地域開発という旗印のもとに新産業都市の指定という表現で一つの政策を試みたけれども，これが本当に合理的な地域開発の目的にかなったものであるだろうか。われわれが苦労して開発した新しい技術の利用と，それによって得られる経済開発の関係を，より十分に検討し，より的確に判断したうえで，重点的な先行投資を行なうために有機的な系統を持った政策を実施してこそ，これが本当に意義があり効果のある地域開発といえるのではあるまいか。また，科学技術行政が理解なき政治家に左右され，もてあそばれたのでは，せっかくのわれわれ技術者の信念が次第に弱体の一途をたどり，ひいては世間の信頼を無くする結果になることをわれわれ技術者は深く反省する必要があると思う。

たまたま，建設省は 20 年後を目標に長期計画のビジョンを発表し，新年度から出発することになった。これを機会に土木技術者としての誇りと信念を持って，技術の進歩発展に努力されるとともに，豊かな社会の構成に寄与されんことを期待しながらこの特集「回顧と展望」を皆様に御送りすることにする。

主　査	仁木　理夫	西　敏賢				
担当委員	浅沼　堯	岡田　哲夫	小笹　太郎	尾仲　章	北田　勇輔	国広　安彦
	堺　幸七	渋谷　祥夫	進藤　忠夫	高橋　裕	土居　則夫	富永　正照
	中山　隆	縄田　照美	服部昌太郎	町田富士夫	松本　嘉司	増岡　康治
	丸山　速夫	宮田　浩邇	本山　蓊	森野　敏夫	横山　義一	吉田　正吾
	米田　宗弘	和田　万里				

本特集の編集に際しまして，貴重なる資料，写真等の提供を承わりました各位，また御助言いただきました皆様，そして特集の一部の執筆を御担当承わりました各位に紙上より厚く謝意を表します。　【編集部】